

プロローグ やってきた刺客

エオメル参上

四月とはいえまだまだ厳しい寒さが残る、とある北の王国のことです。エドウィン王は首都の王宮から少し離れた別邸で、気の置けない側近たちと過ごしていました。広間の暖炉には薪が絶えることなくくべられ、檜の広いテーブルに会した一同には肉や酒がふんだんにふるまわれていました。陽気に、饒舌に語られていく側近である従士（Thane）たちの武勇譚、笑い声……。杯が幾度も交わされながら王と親しい者たちの楽しい語りと寛ぎの時間が過ぎていました。

と、そこに館の従僕が現れ、そつと王の許に近寄り、来客を告げました。商人風の男がエドウィンに面会を求めてやってきた、と。宴は一旦中断され、王をはじめ、広間に集っていた者たちはぞろぞろと謁見の間に移りました。

ほどなく客人が一人、通されました。謁見の間には、奥の一段高いところに置かれた玉座にエドウィンが腰を下ろし、王の前にはセインたちが人の通路をつくるように、左右二列になって立ち並んでいます。客である男はその中をゆっくり歩いて王の近くに進みよると、恭しく腰をかがめました。

かなり遠いところから来たのでしよう、男が身にまとった外套はあちこち汚れ、擦り切れていました。が、身なりそのものは上品であり、男が裕福な商人であることが見て取れました。体軀も堂々としています。男は、はっきりとした声で、自分の名はエオメル、我が主人がエドウィン王の王国と取引を始めたいと強く望んでおり、それを伝えるためにやってきた、と語り始めました。

主からのメツセージを伝える男の弁舌は淀みなく、明瞭なものでした。男を挟むように立っているセインたちは先ほどまでの宴の余韻がまだ残っているのでしよう、隣同士雑談を交わしながら男の話に耳を傾け、頷き合っています。

そのときです。突然男は立ち上がり、外套の中に隠し持っていた剣を抜き、王を目掛けて突進しました。刺客だったのです。剣には相手を確実に殺すため、毒が塗ってありました。もうあつという間の出来事で、王の側近たちはそのとき誰も防御の盾すら持っていま

せんでした。

が、反射的に、横っ飛びに、セインのライラが王と男の間に割り入ります。自分を盾にしたのです。そのライラの体を、凄^{すご}い力で突き出された剣が貫き、エドウインの体にも先端がわずかに刺さりました。すぐさま我に返った他のセインたちがどっと男を取り囲み、滅多切りにして殺します。しかし、その最中^{さなか}、もう一人のセイン、フォルトヘレが必死で抵抗する男の剣で突かれ、ライラと共に死んでしまったのです。エドウインは少し苦しんだものの、大事には至りませんでした……。

一体どこの国の事件？

何か、忍ばせた^{あいくち}匕首^{あいくち}に毒を塗り樊於期^{はんおき}將軍の首を持って政^{せい}(始皇帝)を暗殺しに秦^{しん}の都咸陽^{かんよう}に来た刺客^{けいか}荊軻^{けいか}を彷彿^{ほうふつ}とさせる話です。当然、大切な臣下を二人も殺されたエドウインは怒りの火球と化し、このエオメルという男を送ってきた相手に大鉄槌^{だいてつゐ}を下すことなるのですが、なぜ刺客が来ることになったのかという理由を含め、詳しくは本書の第Ⅲ章で語ることとして、そもそもこれは、一体いつ頃の、どこの国の出来事だったのでしよう。まず「エドウイン」という我々日本人にも馴染^{なじ}みのある英語風の名前が出てきました。

一方で、「ライラ」とか「フォルトヘレ」とか、英語というにはちょっと違和感がある名があります。さらに「エオメル」は架空の世界を舞台にした、映画にもなったツールキン(J. R. R. Tolkien 1892-1973)の『指輪物語』に出てくる登場人物の一人と同じ名前です。ということとは、これはフィクション、全くの作り話でしょうか。

実はこの暗殺未遂事件、西暦六二六年の四月に、ブリテン島にあったアングロサクソン七王国の一つノーサンブリア王国に起こったとされているものです。舞台となった王の別邸は、このノーサンブリア王国の首都ヨークから少し離れたダーウエント川の近くにありました。この事件は『イングランド人民の教会史』(*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*)や『アングロサクソン年代記』(*The Anglo-Saxon Chronicle*)とつたイギリスの古い書物に記載されており、ほぼ事実であろうと今日では捉えられています。ここではそれを多少物語風に膨らませています。

ちなみに、『イングランド人民の教会史』(以降、略して『教会史』とします)とは、ノーサンブリア王国に住んでいた修道僧ベータ(Beata)が七三一年頃に著したものです。ここにはアングロサクソン人の間にキリスト教が広まっていく様子や、七王国の王たちの業績が著者ベータのキリスト教的善悪観を存分に含んだ物語風に綴つづられています。

一方、『アングロサクソン年代記』（以降、『年代記』と略します）は、七王国の一つで後に統一イングランド王国形成の母体となったウエセックス王国において、アルフレッド大王が命じて九世紀末に編纂へんさんが始まった記録書であり、紀元元年から一二世紀頃までのイングランドの出来事が何年に何が起こったという編年体で淡々と記されています。

繰り返しますが、この刺客事件の舞台は古い時代の英国です。そう、ライラ (Lira)、フォルトヘレ (Forthere)、エオメル (Eomer) といった聞きなれない名前は古英語 (OE = Old English) を話していたアングロサクソン時代特有のもので、エドウィン (Edwin) もこの頃は古英語でエアドウィン (Eadwine) と発音されていました。彼は七王国のうち最も北部にあったノーサンブリア王国の強力な王でした。

それにしても刺客に狙われるという、まるでドラマのようなエピソードを持つ王がいたアングロサクソン七王国の時代とは、一体どのようなものだったのでしょうか。

招かれたアングロサクソン人

遙はるか昔、まだイングランドという言葉も王国もなかった頃、ブリテン島の広汎な地域には、ヨーロッパ大陸のユトランド半島周辺から移ってきたゲルマン人の一支族であるジュ

アングロサクソン人の移動ルート



ート人、アングル人、サクソン人たち、すなわち今日アングロサクソン人と総称される人々が築いた複数の王国がありました。それゆえに、それぞれの王国に王がいたという歴史があったのです。六世紀後半から一〇世紀はじめ、英国史にいう「アングロサクソン七王国」(Heptarchy = ヘプターキー)の時代です。このアングロサクソン人、「招かれて」ブリテン島にやってきたということになっています。前述の、この時代の根本史料である『教会史』や『年代記』に、そしてもう一つ、九世紀前半にウエールズ人修道僧のネンニウス (Nennius) が著したと伝えられる『ブリトン人の歴史』(Historia Brittonum)といった古記録に、そのように書かれているのです。

これらの史料は、ブリトン人のヴォルティゲルンという名の有力な首長が、後にスコットランドと呼ばれるようになるブリテン島北部から南下して攻めてくるピクト人をやつつけてもらうために、大陸ユトランド周辺地域に住んでいるアングロサクソン人をブリテン島に招いたとされています。ブリテン島南東部の一地域を、『ブリトン人の歴史』によればサネット島を見返りに彼らに与えることで。

もともとブリテン島には、ブリトン人と呼ばれるケルトの人々がいくつもの部族に分かれ広く住んでいました。また、ブリテン島の北部にはピクト人と呼ばれる、今もその実態がよくわかっていない種族や、アイルランドから渡ってきたスコット人と呼ばれるブリトン人とはまた別のカテゴリーのケルト人がいました。

こんなブリテン島がローマ皇帝直轄の属州だった頃、ここにはローマの軍団が常駐していてピクト人の南下をしっかりと抑えていました。しかし約四〇〇年続いたブリテン島のパックス・ロマーナ（ローマの平和）の時代もついに終わり、紀元四一〇年、ローマがこの島から撤退すると、ブリトン人はピクト人の攻勢に直面しました。慌てたブリトン人は、ゲルマンのアングロサクソン人に自分たちを守ってもらおうと頼んだのだと、史料には書かれています。

騙されたブリトン人

『教会史』や『年代記』の記述を全てそのまま鵜呑みにすることは危険です。けれども、ブリトン人がアングロサクソン人を呼んだのは、事実だろうと考えられています。そもそも、ローマの軍団には多数のゲルマン人傭兵ようへいがいました。ブリテン島にも、距離的に近い大陸ユトランド周辺のアングロサクソン人が多数ローマの傭兵として北方の守備に就いており、体の大きい、組織立って動く彼らの戦闘力の高さはブリトン人も目撃していたはずです。そういった理由から、ローマ撤退後にブリトン人がアングロサクソン人を招いたのは、合理的な判断だと理解できるのです。

かくして『年代記』は四四九年、ヘンギストとホルサという首領兄弟に率いられ、アングロサクソン人戦士が三隻の船でブリテン島にやってきたと記しています。彼らが上陸したイプウイネスフレオットは、今日のケント州エブスフリートであると考えられています。ヘンギストはケント王国の始祖と伝えられる人物です。

『年代記』はまた四九五年に、ウエセックス王国の開祖といわれるアングロサクソン人首領のもう一方の雄セルディックが、息子のキンリックと五隻の船でブリテン島南西部のセ

ルディセソラに、すなわち今日のハンプシャー州の南部付近にやってきたとしています。

五世紀中葉以降、続々とブリテン島にやってきたアングロサクソン人たちは、はじめのうちこそブリトン人との約束通りピクト人を打ち破ります。が、やがて一転、叛旗を翻し、ブリトン人への猛烈な攻撃を開始します。それはあたかも当初からの計画通りといった動きでした。サネット島をもらう程度では、新天地ブリテン島に注がれた彼らのたぎる領土欲は、少しも収まらなかつたということです。

圧倒的な攻勢の前にブリトン人は押され続け、どんどん土地を奪われていきました。そんな中ブリトン人は、アーサー王の原型と考えられる軍事指揮官アンブロシウス・アウレリアヌスに率いられ、形勢を挽回した一時期もありました。けれども、結局は力を盛り返したアングロサクソン人に屈する形になっていったのです。

成立したヘプターキー

この、ブリトン人から力づくで奪い取ったブリテン島の、後にイングランドと呼ばれるようになる広大な地域には、数多くのアングロサクソン人の半国家的な自立勢力が次々と出現しました。そうした勢力は当初二十数個あったということですが、それらは六世紀後

半から大きく七つの王国へと収斂しゆうれんされていきます。

すなわち、ケント、イーストアングリア、ノーサンブリア（デイラとバーニシアが統合された王国）、マーシア、エセックス、サセックス、ウエセックスのアングロサクソン七王国、ヘプターキーはかくして成立したのです。

これら七王国は、一〇世紀前半までの約四〇〇年間、英雄たちの時空間を現出し、それぞれに抗争を展開しつつ、栄枯盛衰の道をたどっていくこととなります。その行程は、まず七王国でいち早く形成されたケント王国が最初に興隆を迎え、次にケント王国に不承不承従っていたイーストアングリア王国が台頭し、次いでデイラ王国とバーニシア王国を統合し出現したノーサンブリア王国が日の出の勢いとなり、八世紀後半の七王国時代中期からはマーシア王国が最盛期を迎えます。

そのマーシアは積年のライバルであるウエセックスと抗争を繰り返し、九世紀前半からはデーン（ヴァイキング）という新たに加わった獯猛とうもうな侵略者に蹂躪じゆうりんされ衰え、最終的に七王国中で唯一残ったウエセックス王国のもと、統一イングランド王国が誕生する流れになります。エセックスとサセックスの両王国は、七王国時代を通じて他の王国に号令する勢いを見せることもなく、おおむねどこかの王国の影響下もしくは支配下にありました。

ブレトワルダの出現

そんな七王国が抗争を繰り返していた時代、その中からひと際抜きん出て他の王国を支配下に置く強力な王が、たびたび出現しました。そういう、他国の王たちの上に君臨する王を一般的概念で「上王」(Overlord)といいますが、特にこのアングロサクソン七王国時代には、『年代記』に「ブレトワルダ」(Bretwalda)と記された傑出した上王たちが出現しました。日本語では「霸王」と訳されます。ベードがラテン語で著した『教会史』ではインペリウム (Imperium) という言葉が霸王に相当するものとして使われています。

その霸王は、七王国時代を通じ何人いたのでしょうか。ベードは『教会史』で七人の霸王を挙げています。時代が早い順にサセックス王国のアエラ、ウエセックス王国のケアウリン、ケント王国のエゼルベルト、イーストアングリア王国のレドワルド、そして冒頭の刺客に襲われたノーサンブリア王国のエドウィン、同じくノーサンブリア王国のオスワルド、オスウィです。また『教会史』より後にへんさん編纂された『年代記』は、『教会史』が挙げた前述の七人を踏襲した上で、ウエセックス王国のエグバートを新たに加え、八人の霸王がいたとしています。

恣意的な？ 霸王選出

これらの王たちは本当に霸王と呼ばれるのにふさわしい活躍をし、偉大な業績を残したゆえに、後になって『教会史』や『年代記』にそう記されたのだと理解していいのでしょうか。

そのあたりは大いに疑問が残ります。最初のサセックスのアエラとウエセックスのケアウリンの二人は、実際にいたかどうかも定かではない伝説的な王たちであり、彼らに関する記録もほとんどありません。偉大な王であるという人々の昔からの言い伝えに敬意を表して、『教会史』の著者ベータがそのまま二人を霸王としたのかもしれない。

ケントのエゼルベルト、イーストアングリアのレドワルド、ノーサンブリアのエドウィンの三人は、霸王としての資格は十分と考えます。けれども、エドウィンと同じノーサンブリアからオスワルドやオスウィイまで霸王に挙げられているのは、ちよつと首をかしげたくくなります。

また、アングロサクソン七王国で一番大きく、かつエネルギーシユなマーシアからは一人の霸王も選ばれておらず、どうも釈然としません。長大な防塁を築いたり、「全アング

ル人の王」という統一国家意識をアングロサクソン人として初めて抱いて、かのフランク王国のシャルルマーニュと対等な関係を築いたオッファですら霸王に挙げられていないのです。

八人の王たち

考えるに、『教会史』や『年代記』は編纂に携わった者たちの極めて強い主観の下、著されたといってもいいでしょう。ベータは信仰心の厚い教会人でしたから、キリスト教の信奉者であるノーサンブリアの王たちを殺したマーシアに好意を寄せることには抵抗があったようです。『教会史』からは、そういう雰囲気を読み取れます。

一方、ウエセックスはオッフアの頃にマーシアに痛め付けられました。よって、自分の国からエグバートを霸王に選出することはあっても、マーシアからは出したくなかったでしょう。

歴史とは、いつも恣意的に書かれるものです。そのことを踏まえ、マーシアの王にも注目しつつ、本書では我が国でほとんど語られてこなかった七王国時代の王たちの中から独自に八人を選び、その生き様を見ていきます。

八人の王たちとは本書に出てくる順に、ケント王国のエゼルベルト、イーストアングリア王国のレドワルド、ノーサンブリア王国のエドウィン、マーシア王国のペンダ、同じくマーシアのオッフア、ウエセックス王国のエグバート、イーストアングリア王国のエドモンド、そしてウエセックス王国のアルフレッドです。

もちろん霸王もいれば、そうではない王もいるこの八人。個性はそれぞれに鮮烈です。家臣に傳かたずかれ、優雅に構えていけばいい後世の王と比べ、自ら真つ先に戦い、負ければ首を取られた、ブリテン島の「戦国時代」に王国を率いた彼らに、これから肉薄します。

註

*1 ブリテン島北部地域が今日的な意味でスコットランドと認識されてくるのは一三世紀後半以降であり、本書がテーマとしているヘプターキーの時代においてはスコットランドという呼称はまだない。本書では便宜的にブリテン島北部地域を指す言葉としてスコットランドを用いている。